

〔研究ノート〕

大和文華館所蔵『大方広仏華嚴經』について

高麗時代の美術作品が持つ特徴には、細密且つ煌びやかな表現が挙げられます。陶磁器では鮮やかな色彩を追求するよりも、色数が抑えられて繊細な文様があらわされ、金工品では煌びやかな金銀による細かな装飾を施す造形が多く見られます。このような嗜好を持つ最たるものの一つに、高麗時代の経巻・経冊があります。仏の教えを経文で記し、仏世界や経典の内容を見返し絵に表す東アジアの装飾経の中でも、高麗経は細い金泥線による細密を極める描写において群を抜いています。平安時代の装飾経に見られる料紙装飾とは異なり、高麗経では料紙は紺紙を含めて単色で、経文は金銀泥が用いられ、見返し絵は、金泥の細線による緻密な線描を主とし、暈かしや彩色は僅かに抑えられます。画面を埋め尽くすように引かれた金泥線によって、まさに描かれた仏世界が輝いているように感じられます。ここでは大和文華館所蔵品について、形状を観察し、高麗経の中での位置付けを見ていきます。

大和文華館が所蔵する『大方広仏華嚴經』は八十巻本の巻第三十五、三十六（各帖31.0×11.0cm、全長は巻第三十五：760.7／巻第三十六：695.0cm）です（図1、2）。折本形式で、紺紙金泥著色、経文は金字一行十七文字、一折六行の配列で書写されています。本紙

に奥書はなく、箱書きや包み布に「伝慈恵大師筆」「慈恵大師」と墨書があり（図3）、平安時代の慈恵大師良源（912-985年）の筆に仮託されています。加賀前田家旧蔵品です。

紙は厚手で、表紙及び背表紙には、これが三～四枚重ねられます（図4）。紙継ぎは表紙、見返し、経文、裏表紙まで通して巻第三十五は九枚、巻第三十六は八枚です。紙背の紙継ぎ部分には料紙の順番が金字で付され、巻第三十五には「周径三十五 二ト」（下線部分の漢数字は各紙順に五／六／三／四／七が入る）、巻第三十六には「周径三十五 二ト」（下線部分の漢数字は各紙順に三／四／五／六／七が入る）と記されています。巻第三十五では漢数字が順に並んでおらず、二、五、六、三、四、七となっていたため、経文を確認したところ、第四・五紙（紙背文字「五／六ト」、図5）と第六・七紙（紙背文字「三／四ト」）の内容が逆に配置されており、経文の内容と漢数字の順番は合っているため、二枚ずつ順番が逆に継がれていることがわかりました。本紙の保存状態は良好で、接ぎ直した痕跡も認められないため、当初の継ぎ間違いと見られます。経文を一枚ずつ書写した後に接ぎ合わされた経典製作の行程がうかがえます。

表紙及び裏表紙には太線と細線の二重線による枠線の中に、金泥線によって豊かな宝相華唐草文が隙間無く

描かれ、宝相華唐草文は経冊下端部に唐草の枝先が描かれ、下方から上方へと伸びるように構成されています。表紙の中央部に、宝相華の形状に合わせるように蓮台が描き込まれ、その上に「大方廣佛華嚴經卷第三十五（三十六）」と記された表題が載り、頂部は蓮葉を象っています。

見返し絵には『華嚴經』『十地品』の内容が図示されており、金泥線の他、毘盧遮那如来及び金剛藏菩薩の肉身部に金泥が施され、輪郭線は朱線で起こされています。眼や口に墨が用いられ、頭部などに群青、朱、白など僅かに彩色が施される描法は徳川美術館（巻第一、巻第四）、個人蔵（巻第七十八）にあり、体裁や経文が共通することから、本来一具であったと考えられています。前述した表紙の表題下部の蓮台を宝相華文に形状を合わせる描き方も、これらに共通する特徴です。また、『大方廣佛華嚴經』『行願品神衆合』（元・至正十年（1350）銘、韓国国立中央博物館）など画風が近似することから、1340年代から1350年代初め頃の書写と推定されています（林進「高麗時代の装飾経」『高麗仏画』、朝日新聞社、1981年）。

見返し絵の周囲は太い二重圏線で囲まれ、三鈷杵が連ねられています。三鈷杵は鬼目が大きく、周縁部に四個の珠のようなものが付き、鈷は細長く、付け根から分かれて小さな鈷が付く形状です。三鈷杵を連ねた枠は高麗経には数多く見られますが、その中で大和文華館本と同形の三鈷杵を連ねる高麗経に「大方廣佛華嚴經」巻第三十一（元・至元三年（1337）銘、Leeum, Samsung Museum of Art）、

『妙法蓮華經』七卷（元・至元六年（1340）銘、鍋島報効会徴古館）、『大方廣佛華嚴經』『行願品神衆合』（元・至正十年（1350）銘、韓国国立中央博物館）、『妙法蓮華經』七卷（元・至正十三年（1353）銘、根津美術館）、『妙法蓮華經』七卷（元・宣光七年（1377）銘、湖林博物館）があり、14世紀前半から後半にかけて認められます。

大和文華館本の見返し絵は画面にはほぼ余白を作らず、細い金泥線を緻密に用いて画面が埋められています。画面上方の渦巻く雲文の上には空をあらわす部分があり、太陽や月、星宿が描き込まれますが（巻第三十六見返し左上部、図6）、やはり細い横方向の平行線が充填されて、花卉が楔形をした花文が散らされます。これは『華嚴經』巻第三十六に「最極清浄如虚空、不染世法猶蓮華」とあり、清浄な虚空の表現と考えられますが、同様な表現は『大方廣佛華嚴經』『行願品神衆合』（元・至正十年（1350）銘、韓国国立中央博物館）、『金剛般若波羅蜜經』（元・至正十一年（1351）銘、愛知・太平寺）、『妙法蓮華經』七卷（元・至正十三年（1353）銘、根津美術館）の巻第三・四・七に見られ、制作年は1350年代に集中しており、大和文華館本が14世紀中頃の制作と考えられる根拠の一つといえます。

経典では金属の持つ特質を捉えて譬えられることも多く、磨かれた金の輝きや鏡面の光の反射は、しばしば「明浄」の語によって、澄みきった、清らかさをあらわすために用いられています。高麗経の見返し絵は主に金泥による線描で空間が埋め尽くされ、美しく荘厳されています。ここに描き出された光り輝く画面には、金の輝きに託された「明浄」の意図を読み取ることができるのではないのでしょうか。（瀧朝子）

図 1



図 2



図 3

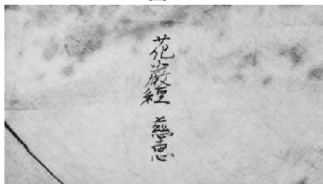


図 4

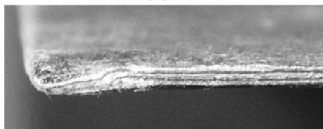


図 5



図 6

